

安吾文学と矢田津世子：二人の出会いを中心として

花田，俊典

<https://doi.org/10.15017/12086>

出版情報：語文研究. 46, pp.9-17, 1978-12-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

安吾文学と矢田津世子

——二人の出会いを中心として——

花 田 俊 典

一

坂口安吾の自伝小説「二十七歳」(「新潮」昭22・3)のなかには、よく知られるとおり、安吾が矢田津世子を知って、「頭のシンがしびれるぐらい」「恋の虫につかれた」経緯が語られている。それによると、まず昭和七年の「春」、安吾は「半職業的な同人雑誌」『文科』(牧野信一主宰、昭6・10、同7・3、全四冊、春陽堂刊)の同人仲間の河上徹太郎の紹介で、そのころ京都大学の学生として京都にいた大岡昇平に下宿の部屋を世話してもらい、「一カ月あまり」京都へ旅行した。そのとき、大岡昇平と高等学校以来の友人で、同じく京大の学生であった加藤英倫と「友達になり」、「毎晩」のように「京都の飲み屋」へ行ったり、「一週間ほど神戸へも一緒に旅行した」りした。そうして、この京都旅行ののち、安吾は、上京してきた加藤英倫の紹介によって矢田津世子を知る。「二十七歳」には、すなわち次のように書かれている。

矢田津世子は加藤英倫の友達であった。私は東京へ帰ってき

た。加藤英倫も東京へ来た。たぶん彼の夏休みではなかったのか。私には、もはや時日も季節も分らない。とにかく、私と英倫とほかに誰かとウキンザアで飲んで来た。そのとき、矢田津世子が男の人と連れだって、ウキンザアへやってきた。英倫が紹介した。それから二三日後、英倫と矢田津世子が連れだって私の家へ遊びにきた。それが私達の知り合った始まりであった。

この有名な「ウキンザア」における安吾と矢田津世子との出会い、定評ある関井光男氏の労作「伝記的年譜」(『定本坂口安吾全集』第十三巻所載、冬樹社、昭46・12)をはじめとする近來の諸年譜によれば、昭和七年の八月の出来事であったと目されている。たとえば「伝記的年譜」を見てみると、その昭和七年八月の項には、「加藤英倫が夏休みで上京、酒場『ウキンザア』で加藤英倫の紹介により矢田津世子を知った」と、つづいて同年九月の項には、「この頃から矢田津世子と個人的な交際をするようになった」と記されているごとくである。他に異説はなく、また疑問視するむきもうかがえない。^{註1}

そのことに對して、先にわたしは、若干の疑念を呈したことがある（「坂口安吾と矢田津世子——その出会いをめぐって」『日本近代文学会九州支部会報』19号、昭53・6）。いま再びここで簡単にふれておけば、「二十七歳」に語られている経緯のうち、昭和七年の「春」の京都旅行については、当事者の一人である大岡昇平に、「京都へ坂口に下宿を世話したのは、昭和七年の三月だったと思う。僕は京大を卒業するところで、黒谷の前の、加藤英倫と同じ下宿に室を取っておいだ」との証言（「冒蕪の頃」^{注2}）があり、またその他の方面などから、おおかたの裏づけはとれる。すくなくとも、京都旅行そのものは事実であり、安吾が加藤英倫を知ったのは、その昭和七年の「三月」から「一カ月あまり」の京都旅行のときであった、と認めることはできるだろう。

ところが、このち加藤英倫が上京して、「ウキンザア」で安吾に矢田津世子を紹介するという肝要の出来事が、はたして安吾の言うように「彼の夏休み」であったのか否かとなると、それを検証するに足る証言その他の資料は、わたしの知るかぎり、まったく見あたらないのである。「二十七歳」は、そもそも「事実ということに主点がない」との作者自身の弁明もあり、記憶がいや意図的な虚構のかなり目につく作品であり、正確な年月まで知るための伝記資料としての価値は、どちらかと言えはひくい方の部類に属する。しかも安吾は、ことこれに関しては、つづく一文で「私には、もはや時日も季節も分らない」とわざわざ断っている。「二十七歳」に「たぶん彼の夏休みではなかったのか」と書かれているからといって、そのことだけをたよりに二人の出会いを昭和七年の八月と断定してしまうのは、やはりためらわざるをえないだろう。加藤英倫

は、安吾や大岡昇平の伝えるところによれば、「ステデン人の母を持つアイノコで、端麗な美貌であるから、京都も神戸も女友達ばかり」（「二十七歳」）の、かつ「黒田孝子女史と熾曳を統けるためかどうか知らないが、わざと落第して京都に残っていた」（「冒蕪の頃」）ような京大の学生であったという。夏休みでなくとも上京してくる可能性は、大いにあった筈なのである。

われわれは、けっきょく、安吾の昭和八年一月三十日付矢田津世子宛書簡に、「お葉書拝受いたしました。／先日はお目にかかれなくて残念でしたが、又、改めてお訪ねいたしたいと思っています。／お暇の折には、どうぞ又、遊びにおいで下さい」云々とあることよって、すでに二人の交際がはじまっており、かなり進展しているのを、やっと確認できているにすぎない。とすれば、安吾が矢田津世子を知ったのは、京都旅行をおえて東京に戻ってきた昭和七年の四、五月頃より翌八年の一月はじめ頃までのいずれかの時点においてであった、とあくまでも見ておくのが、いまのところでは順当なのだと思われる。

おおよそ以上のようなことを言ったうえで、わたしは、二人の出会いは昭和七年の七月頃か、もしくは同年の十一月頃ではなかったのかという二様の仮説を、従来の昭和七年八月説の根拠をただす意味もこめて、たててみたのであった。

その考えに、基本的には、いまもかわりはない。ただ、あらかじめ言うおくなら、いまのわたしは、二人の出会いを昭和七年の十一月か十二月頃と推定する考えを支持する気持のほうがつよい。そうして、もしそうだとすれば（あるいはそうでなくとも）そこに生じてくるわずか数ヶ月ばかりの差というものは、矢田津世子との恋

愛体験が安吾文学にはたした意義、ひいては安吾の文学そのものを考察するうえにおいて、けっして軽視できない興味深い問題を提示してくれるのである。

二

一つの女体としての矢田津世子が、他のあらゆる女体と同じだけの汚らしさ悲しさにみちたものであることを、当時の私といえども知らぬ筈はない。それどころか、女の情慾の汚らしさに逆上の怒りを燃やすたびに、私はむしろ痛切に、矢田津世子がそれと同じものであることを痛く苦く納得させられ、その女の女体から矢田津世子の女体を教えられているのであった。それにも拘らず、逆上の怒りのたびに、矢田津世子の同じ女体を、一つ特別な神聖なものとして思いたしてもいるのだ。

「二十七歳」について書かれた自伝小説「三十歳」(『文学界』昭23・5、7)の周知の一節である。「その女」とは、「いすこへ」(『新小説』昭21・10)などにも登場する「良人と別れた」「非常に多淫な女」、すなわち昭和九年の三月頃より翌十年の末にかけて安吾と同居まがいの懶惰な生活をともにしていた酒場「ボヘミアン」のママ「お安」のことをさしているが、それはさておき、ここには、安吾の矢田津世子への思いがたいへんによく語られている。「半生のあらゆる思想を燃焼せしめて一つの物語を展開し、」「そこから生れ変って来ようという切なる念願をいだいて」取り組んだという意欲的な書き下ろし長篇小説「吹雪物語」(『竹村書房』昭13・7)への道を一途にたどっていた時代の安吾が、このように矢田津世子の「女

体」をめぐる、他のあらゆる女体と同じだけの汚らしさ悲しさにみちたもの」にして「一つの特別な神聖なもの」でもあると夢想し、その想念を自身の文学に積極的にとり込んでいることは、じっさい当時の諸作品にあたってみれば容易に納得できるところである。

二三瞥見しておけば、まず「吹雪物語」については、例のごとく作者自ら「私の『吹雪物語』はまるであなた(II矢田津世子、引用者注)の肉体を汚し苦しめ歪めさいなむ畸形児の小説、まったく実になさけない汚い魂の畸形児の小説だった」などと言明しており、いままら贅言を要すまでもないとして、たとえば「狼園」(『文学界』昭11・1・3)に目を転じて、そこに矢田津世子との恋愛体験がかなり密接に絡んでいることは否定できない。

「狼園」のヒロイン伊吹山秋子は、主人公の「私」と「恋愛」関係にあるが、一方では「私」の叔父にあたる芹沢東洋から「狂乱的な愛慕を寄せ」られ、思わせぶりにふるまっている「淫婦的な」若い女である。「私」は、ふとしたことから「秋子との恋愛に希望を持ちはじめ」、「心中顛倒する歡喜の絶頂」を感じたりもするが、「秋子は然し冷静であっ」て、「私を様々な様式で待ちくたびれさせ」、「絶望に沈」ませる。

秋子はやがて私の前では高深な娘のように振舞いはじめていたのであった。私の自惚れた言い方によれば、秋子は私の前に現れて高深な処女に再生したのだ。

この「淫婦」にして「高深な処女」でもある秋子は、そのまま「三

十歳」に語られている特異な二重のイメージを備え持った矢田津世子にほかなるまい。あきらかに安吾は、秋子に矢田津世子を想定して、「狼園」を書きすすめている。それは、作者安吾の筆が秋子をめぐっていきさか不自然な動きを示していることによっても十二分に証明できるところだが、いまは「狼園」に深くかかわっているきではない。

「狼園」より一年ほど早く発表された作品の一つに、「淫者山に乗り込む」(『作品』昭10・1)と題する短篇小説がある。主人公の青年が、「自らの悪徳を露出することのみがその悪徳を救う道だ」と自分に「言いきかせ」て、「結婚の前に許嫁の娘を強姦」する計画をたて、いざ「娘を山へ連れ出し」てその計画を実行に移そうと懸命に試みるが、ついに果たさなかった、という簡単なストーリーラインである。その結末の部分には、次のような一節が見えている。

この冒険の蹉跌によって、併し娘への情欲は青年の心の中に確定しました。彼は娘の肉体を描かずに情欲を行うことができなくなりました。それゆえ青年は情念のわきたつ度にこの結婚を期待する気持を持つようになりました。併し青年の心には尚世の中の見知らぬところに必らず清純な恋もありうることをどうしても否定することができなかったのは、これも詮方ない事実でありました。

「娘の肉体を描」いて「情欲を行」い、一方では「清純な恋」を夢想してもいる青年の心理は、矢田津世子に対する安吾の想念の反映したものと思なすのがあたっている。とすれば、この「淫者山に

乗り込む」も、やはり先の「狼園」と同様に、矢田津世子との恋愛体験の投影した作品の一つに数えてまず失当ではないのである。

こういった具合に、「吹雪物語」へと向かう時期の安吾の諸作品の大概は、いわゆる精神(理性)と肉体(本能)の分裂、葛藤、相克とでも言うべき問題を扱っており、そこに矢田津世子との恋愛体験をかなり密接に絡ませている。そのことについては、すでに一般によく知られているところでもあり、これ以上の説明を要するまでもないだろう。

さて、それでは、安吾の文学がはたしていつ頃からそのような道をたどり始めているかといえ、昭和七年九月十八日発行の『詩と詩論』改題・季刊『文学』第三冊(厚生閣書店)に発表された小説「Pierre Philosophie」からだと言つてよい。すなわち、そこには次のごとき一節が登場している。

女は剛巧でさえなかった。あらゆる欠点の魅力をのぞけば塵埃のような女だった。二人は、行き交う万人の男女に心を惹かれてきたよりも、もっと稀薄な恋心で、いわば獣の情慾で露骨に結び合ったのだ。

この「獣の情慾で露骨に結び合ったのだ」なぞという直截的な表現は、以前の安吾の諸作品には決して見られなかった新しいものである。以後、安吾の文学は、しだいにこういった傾向をつよめ、先の「淫者山に乗り込む」や「狼園」などを経て、一直線に「吹雪物語」へと向かっていく。「Pierre Philosophie」は、小説全体の作風としては依然旧態のままだとはいえ、安吾文学の流れからすれば、

まさしくその転換点に位置する重要な注目すべき作品なのである。

そのような安吾文学の変化の背後に、矢田津世子との恋愛体験が何らかの形でかかわっていたのではないかと推測するのは、安吾文学の研究者ならば誰も思いあたる、ある意味で自然な発想であるだろう。たとえば村上護氏は、「小さな部屋」(『文藝春秋』昭・こをとりあげて、次のように述べている。^{注4}

安吾は矢田と交際するうちに、作風にも変化があった。彼は昭和八年二月の「文芸春秋」に、「小さな部屋」という小説を書いているが、これまでのものと趣を異にしている。あるいは、矢田からの影響で、これまでの観念的なものに、社会性を導入しようとしたのらしい。矢田はその前月、「作品」に「霧・プッペの事ども」というのを載せている。彼女の方も、安吾に影響されてか、これまでの左翼的なものから、純文学へ脱け出そうと試みている。

もちろん、いま見たとおり、「作風に変化があった」のは、村上氏の指摘する「小さな部屋」からではなく、もっと早く執筆された「Pierre Philosophie」からである。また、安吾の文学が「矢田からの影響で」変化した、と一概に見なしてしまうことについても、いささかの疑問は残る。だが、精神と肉体の問題が矢田津世子との恋愛体験と密接な結びつきを持っていることを思えば、こういう評言がそれなりの説得力をもって響いてくるのは如何ともし難いところであるだろう。

とすれば、安吾が矢田津世子を知ったのは、「Pierre Philo-

sophie」執筆の前だということになってくる。安吾がそれをいつ執筆したかは不明だが、発表誌の「文学」第三冊が昭和七年の九月十八日発行であることからすれば、それより以前であったことは確かである。先にわたしが、なかば従来の昭和七年八月説を修正するような形で、二人の出会いを昭和七年の七月頃と目したゆえんである。

三

安吾が矢田津世子を知ったのが、もしも昭和七年の七月頃であって、「Pierre Philosophie」執筆以前だとするならば、安吾文学の流れを考えるうえにおいて、たしかに都合がよい。なぜなら、安吾は矢田津世子に恋することで自己内部に芽生えた「獣の情慾」(本能)に注目し、それを一つの契機として以後積極的に精神と肉体の問題を追求しつづけ、ついには例の「吹雪物語」に取り組むに至ったと、いうごく自然で明快な図式が描けるからである。

とは言うものの、「Pierre Philosophie」や「小さな部屋」には、先の「狼園」や「淫者山に乗り込む」などにおいて見られたような、矢田津世子との恋愛体験が介在していることを裏づける有力な証拠は何もない。と同時に、二人の出会いを昭和七年の七月頃と仮定した場合、そこにいくつかの不審な点が生じてくることは否めない。

たとえば、安吾は、「二十七歳」のなかで、「そのころ『桜』という雑誌がでることになった」と言っている。「そのころ」とは、二人が知りあった頃のことである。「桜」(昭8・5・5同9・5、中西書房のち近藤書店)の創刊号は昭和八年五月一日発行だが、「桜」を創る

話が持ちあがったのは、もちろんそれより早い。創刊号に載った同人八人による座談会「文学の新精神を語る」の末尾には、「一九三三年三月二六日／於新宿中村屋」とある。同人の一人だった田村泰次郎は、「八年の春頃のこと、大島敬司が一つの話を、私たちのところへ持ちこんできた」と回想し、また同じく井上友一郎は、「昭和八年に入って、同人雑誌の中でも力のありそうな者が集まって独自の同人雑誌を作ろうではないかということになった」と後年語っている。つまり、「桜」創刊のための準備が始められたのは、おそらく早くとも昭和八年になってからのことであり、もし二人が昭和七年の七月頃に知りあったとすれば、そこに半年以上も経っているわけで、「そのころ」という安吾の言葉は、まったく適切ではないことになってしまふのである。

あるいはまた、書簡に関しても、同様の事情がある。周知のとおり、冬樹社版『定本坂口安吾全集』に収録されている安吾の矢田津世子宛書簡のうち、もっとも早いものは昭和八年一月三十日付である。「津世子の姪に当る百合子さんの話によると津世子が亡くなつたあとしばらく経った時期に、百合子さんの手で遺品が整理され、手紙類は約半分位にへらされたが、とくに安吾のものに関しては、少女の潔癖な思いから、多くを灰にした」にせよ、それ以前のものがただの一通も残されていないのは、やはり不審だと言わざるをえない。安吾自身は、「三日に一度は手紙がつき、私も書いた」と「二十七歳」で言っているところなのである。

さらに、「二十七歳」には、次のような一節がある。

英倫と一緒に遊びに来た矢田津世子は私の家へ本を忘れて行

った、ヴァレリイ・ラルボオの何とかいう翻訳本であった。私はそれが、その本をとどけるために、遊びに来いという謎ではないか、と疑った。私は置き残された一冊の本のおかげで、頭のシンがしびれるぐらい、思い耽らねばならなかった。なぜなら私はその日から、恋の虫につかれたのだから。私は一冊の本の中の矢田津世子の心に話しかけた。遊びにこいというのですか。そう信じていいのですか。

然し、決断がつかないうちに、手紙がきた。本のことにはふれておらず、ただ遊びに来てくれるようにという文面であったが、私達が突然親しくなるには家庭の事情もあり、(中略)私は遊びに行った初めての日、母と娘にかこまれ、家族の一人のような食卓で、酒を飲まされて寛いでいた。

矢田津世子と加藤英倫が安吾の家を訪れたのは、「ウキンザア」で知りあつてから「二三日後」のことだが、この一節には、注目すべき二つの点がある。

まず第一は、安吾が最初に矢田津世子の家へ遊びに行ったとき、彼女はすでに家族と一緒に住んでいた、ということに関してである。近藤富枝氏の「花蔭の人——矢田津世子の生涯」(講談社、昭55・5)によれば、昭和二年四月、兄の不二郎の転勤により母と共に名古屋へ移り住んだ矢田津世子は、そこで文学活動をはじめ、昭和五年十二月、「翼を飛び越える女」で『文学時代』の懸賞小説に当選した。翌六年の一月頃、文学で身をたてるべく単身で上京し、しばらく笹村雪子宅に寄寓していたが、やがて目白会館という質素な木造二階家のアパートに落ちついた。そして昭和七年十一月、兄の不

二郎がふたたび転勤で東京へ戻ってきたのを機に、一家三人は下落合に居をさだめ、矢田世津子は家族とともに生活するようになった、という。一方、「二十七歳」の記事によれば、安吾は、この家族と同居時代の矢田世津子と知りあい、その家を訪れているのである。

第二は、矢田世津子が安吾の家に忘れていったという「ヴァレレイ・ラルボオの何とかいう翻訳本」についてである。おそらく、その本は、第一書房からでた堀口大学・青柳瑞穂共訳の「仇ごころ」(原題BEAUTE MON BEAU SOUCI) だったのではあるまいか。いかにも、安吾が「遊びに來いという謎ではないか」と「思い耽」るに似つかわしい本の題名であり、その発行日は、昭和七年十月十五日となっている。国立国会図書館編の「明治・大正・昭和 翻訳文学目録」(風間書房 昭34・9) によれば、この「仇ごころ」は、日本で最初に出版されたヴァレレイ・ラルボオの翻訳本なのである。

以上のことから、安吾が矢田世津子を知ったのは、昭和七年七月頃より、むしろ同年の十一月か十二月頃だったと考えられてくる。そのように仮定してみても、はじめて、いま見た『桜』の件、書簡の件、あるいは矢田世津子の家族の件、そしてヴァレレイ・ラルボオの翻訳本の本の件という、それらがすべてうまく納得できるのである。

ここに、安吾文学を考案するうえで、かなり興味深い事態が現出しよう。すなわち、もし二人の出会いが昭和七年の十一月か十二月頃であったとすれば、安吾は、矢田世津子と知りあう前に「Pierre Philosphale」を執筆し、すでにそこで精神と肉体の問題に注目する姿勢を示していることになる。「吹雪物語」およびそれに近い

時期の諸作品においては、精神と肉体の問題と矢田世津子との恋愛体験とが緊密にかかわっているにもかかわらず、「吹雪物語」に至る道の基点ともいべき「Pierre Philosphale」が矢田世津子と何の関係もないものであるから、安吾文学の流れからして、一見いささか不自然だと印象は拭いきれないのである。

だが、さらに一歩すすめて考えれば、それは、さほど不自然だというわけのものではない。むしろ、そのほうが、問題の本質をより端的にもの語っているとも言ってよい。

四

「小さな部屋」の冒頭で、「一種のディレッタント」の菲山痴川は、「出鱈目な女詩人」の浅間麻油に向かって、次のようなせりふを吐いている。

「私に避け難い知り難い嘆きがある。そのために私はお前に溺れているが、お前によって救われるとは思ってもよらぬ。苦痛を苦痛で紛らすように私はお前に縋るのだが、それも結局、お前と私の造り出す地獄の騒音によって、古沼のような沈澱の底を探りたい念願に他ならぬ」――

いまここで、このせりふが、矢田世津子を想定してなされたものかどうかを詮索するつもりはない。じっさい、そうであるのかもしれないが、そうではないのかもしれない。その真偽のほどは、早急には決めがたい。しかし、何よりも重要なのは、当時の安吾が、かかる認識を持っていたという事実である。このことは、留意しておか

ねばならない。

痴川はまた、「麻油に縋りついて到頭めそめ泣き出し」ながら、次のように言っている。

「俺だけは忘れないようにしてくれ。俺はもう自分のれっきとした身体さえ、手で触れてみても実在するようには呑み込めない頼りない人間だ。この気の毒な可哀そうな俺だけは忘れないように、頼む、お願いだ……」

すなわち、痴川の負わされている「避け難い知り難い嘆き」である。これが、そのまま作者安吾の「嘆き」でもあることは、同類の一節が各所に頻出していることによっても領けよう。

ここから脱出せんとする安吾の願望は、当然のことながら、きわめてつよい。安吾の文学が「Pierre Philosophie」で変化を示したのも、いわば作者の「古沼のような沈澱の底を探りたい念願」によるものと言ってよく、それは、そこに次のごとき一節が書きつけられていることによっても明白である。

もはや我々の生活では、最も人工的なものが本能であり得ることを、呂木は絶望と共に知った。

安吾が「獣の情慾」(本能)に着目した最たる理由が、つまりここに語られているのである。「小さな部屋」には、もっと詳しい一節が見えている。

「俺達の複雑な生活では、最も人工的なものが本能であったりしている。(中略)畢竟するに人間なるものは、その生治に於て先ず動物的であることを脱れたいのだ。だいたい文化に毒された吾々がデリケートな文化生活の中から自分を探し出そうとするのが已に間違っているものであって、吾々は動物的な野性から文化を批判し、文化を縦横に蹂躪しながら柄に合ったものだけを身につけて育つようにしなければならなかったのだ……」

そして、このあとにくるのが、「新らしき性格感情」(「櫻」昭8・5)における「テスト氏」宣言である。簡潔に見ておけば、安吾は、まず「サンチマン・ソシヤル社会感情(理性)」と「サンチマン・ビロジック動物感情(超理性的な感情)」とに注目する。そして、「標準が美醜から才能へ変わったところで」、「動物感情の消滅する理由は見出しがたく」、「同時に動物感情の消滅が人生を豊富にするかどうかを、私は今判じがたい」ので、「私は、私自身を実験台上へさせて、一人のテスト氏を私の中から出発せしめ、このことを考えてみようという気持になっている」と述べている。

安吾が矢田世津子を知ったのは、このような「Pierre Philosophie」から「小さな部屋」をへて「新らしき性格感情」の「テスト氏」宣言に至る文学的過程のなかにおいてであったのである。わたしとしては、おそらく「小さな部屋」執筆の頃であっただろうと推測するわけだが、その最終的な決着は今後をまつよりほかない。しかしながら、いずれにせよ、安吾は、「テスト氏」宣言をなしたときには、すでに矢田世津子との恋の渦中であつた。その安吾が、「私自身を実験台上へさせて」、「一人のテスト氏を私の中から出

発せしめ、「社会感情」と「動物感情」、言いかえれば精神と肉体の問題を「考えてみよう」と言っているのである。当然そこには、矢田津世子との恋愛体験が絡んでいたと考えざるをえない。つまり、安吾は、自身の矢田津世子への恋愛感情に、きわめて認識的・な態度で接しているのである。

したがって、「小さな部屋」冒頭における痴川の麻油へのせりふは、結果から見れば、安吾にとつての矢田津世子との恋愛体験の一面面の真実をついたものであると言つてよい。それは、但し、安吾の矢田津世子への恋がニセモノであるということには、けつしてならないのである。安吾の内部に、「テスト氏」と観察者（作家）とが住んでいた、というあたりまえのことなのである。

もし、安吾が「Pierre Philosophale」を書いたあとで矢田津世子と知りあったのであれば、……。安吾にとつて矢田津世子は、いわば格好の獲物として登場してきたことになり、そのへんの事情が、いっそうはっきりと説明できるのである。もちろん、安吾の恋そのものは、自然発生によるものであろうが——。（未完）

注1 かつての随年譜、たとえば『日本国民文学全集30 昭和名作集(四)』(河出書房、昭31・1)所載「坂口安吾年譜」には、「昭和七年」三月、京都におもむく。大岡昇平の下宿で加藤英倫を知る。その後まもなく上京、加藤の紹介で矢田津世子を知る」とあり、「坂口安吾選集」第八卷(創元社、昭32・6)所載「年譜」(渡辺彰編)とあり、「日本現代文学全集90 石川淳・坂口安吾集」(講談社、昭42・1)所載「坂口安吾年譜」(久保田芳太郎・辻淳作製)などにも同様の記事が見える。その後、「伝記的年譜」以来、「坂口安吾研究」(南窓社、昭48・6)所載「生活年譜」(高野良知・森泉ケイ子作製)や旺文社文庫「信長」(昭49・4)所載「年譜」(兵藤正之助編)などは、ことごとく二人の出会いを昭和七年八月と断定してゐる。

注2 創元社版「坂口安吾選集」月報7(昭32・3)。なお、引用文は、「昭和文学の証言」(文芸春秋、昭44・7)に収録されたものに拠った。

注3 「わが思想の息吹」(『文芸時代』昭23・3)

注4 「再版に際して」(『吹雪物語』新体社、昭22・7)

注5 「戯作者文学論」(『近代文学』昭22・1)

注6 「聖なる無頼」坂口安吾の生涯(講談社、昭51・7)

注7 「わが文壇青春記」(新潮社、昭38・3)

注8 「泥絵の自画像」(エポナ出版、昭52・11)

注9 「花蔵の人——矢田津世子の生涯」(講談社、昭53・5)

注10 同書には、普及版と特装版とがある。わたしの架蔵本には「普及版二千二百部」とあるが、そこにはまた、次のように書かれている。

別に和紙刷百部刊行

訳者寄贈本 七部

内 刊行者寄贈本 五部

発売本 八十八部

この特装版については未見だが、おそらく同時に発売されたと一応みなしておきたい。

〔附記〕

引用文は、旧漢字のものはすべて新漢字に改めた。なお、安吾文は、冬樹社版『定本坂口安吾全集』に拠った。